

国語

(六〇分) 答えはすべて解答用紙に書き入れること。

一

次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

満員電車へのベビーカーの乗り入れに対して、「周りへの配慮がない」といった意見があることを先だって紹介しました。配慮がないとは、迷惑だし、ワガママなことだと言っているに等しいでしょう。この言い回しはなかなか使い勝手がいいものです。ベビーカー問題に限らず、ちまたの炎上騒ぎで、誰かをたしなめたり、ヒハンする場合には、よくこの手の文言を目にします。

それだけにモヤツとする言葉でもあります。というのは、どういう出来事であれ、ともかくこの言葉を用いれば、何か言っているような気になるし、それなりの正当性があるように思えてしまいます。そういう不思議な力があります。ありふれた表現でありながら実に守備範囲が広く、融通が利く言い方です。だからこそ、この言葉は私たちが生きる上で重圧に感じながらも、自分の内側では他人をジャッジする基準に用いている「迷惑とワガママ」の価値観の姿を知る上で手がかりになりそうです。

というのも、「周りへの配慮がない」という文句をガクメン通り受け取るのではなく、「この文言を使うことで、その人は何を言おうとしているのか？」と視点を変えて捉えようと、見えてくるのは、これを口にする人の思惑だからです。「周り」には自分も含まれているにもかかわらず、そこが背景に溶け込んでぼやけているのはなぜでしょう。

おそらくは「他の人はともかく私に対する気遣いがない」ことへの違和感がいちばんのポイントでしょう。「あなたの行いは私の気持ちをひどく損ねている。だから私に対して一言あってもいいのではないか」という隠れた意図がこの発言の主体性のなさを演出しているのだと思います。

そうなると周り、(A)「みんな」という言葉に換えて自分の心情を表しているのはなぜかと言えば、仮に「私への気遣いがない」と前面に自己を押し立てて主張してしまつたら、みんなから「結局は自分かわいさか!」とばかりに今度は自分がワガママと言われかねないからでしょう。知らぬ間に「素の自分を出して、思っていることを言うのはワガママなことなのだ」という判断をしているということなのです。

(B)、この言いようは引つかりなくそのまま聞き流してしまいそうですが、ちょっとおかしいと感じないでしょうか。「思っていることを言う」ことがどうして「ワガママ」にすかさず結びついてしまうのでしょうか。(C)「みんなにワガママだと思われてしまう」と、実際に言われたわけではないのに周囲の視線を気にして、先回りするように自分の素直な思いを抑圧しています。

他人にどう思われようが、「私に対する気遣いがないことは受け入れられない」と自分が自分であることを明らかにする。それへの恐れが「みんな」の意見と足並みを揃えるほうに働きかけているのではないかと思えます。そして、恐れからみんなと調子を合わせているということは、カッコとした考えが本人の中に取り立ててあるわけではなく、空気やノリ、流れ次第でどうでも変わるということなのです。ベビーカーの乗り入れを問題にしない空気になれば、それになびくでしょう。

このように見ていくと、「周りへの配慮」を持ち出し、ものごとの善し悪しを他人にならって判断しようとする態度に潜んでいるのは、「私のことを気遣って欲しい」であって、決して起きてくる出来事への関心ではないとは言えないでしょうか。

巧妙に意図を隠しながら、実はまったく自分のことしか考えていない。「人をワガママと非難するけれど、あなたのほうがよほどエゴイストだ!」などと言いたいわけではありません。また、隠された事実を指摘するといった手法を磨き上げていくことを鋭さと思う人もいるかもしれませんが、残念ながら私たちが自分を離れた外部の出来事について語っている内容は、自身の願望や期待を含めた、他に承認を求める意見の披露であることがほとんどです。我が身を冷静に振り返ると、人についてとやかく言えやしないのが実情でしょう。

自分はさておきというのは確かに甘えた態度かもしれませんが、かといって私たちは聖人ではないので、顕示欲を完全に捨て去ることは難しい。ただ、自覚しておいたほうがいいのは間違いありません。どれほど鋭い意見を養ったところで行き着く先が承認欲求なら、なんら変わらない現実の繰り返しに手を貸すことではないからです。

他人との関わりの中で同調性は自然に生じてしまうものです。同調の中で安心や安全な感覚が得られます。(D)意図的に調子を合わせるときに生まれるのは何でしょうか。

ただみんなと同じであることに価値を置き、みんなと同じであろうとするのは、自分が自分であることを表明する、いわば自分の責任のもとに行動することが迷惑やワガママだと指摘されることを避けるためとしたら? 本当は心中に思うところはあ

国語

ど、周りを気にして口にはできない。そういう私を氣遣って欲しい。これが同調性になびきたがる。ヨクボウの正体だとしたら?」^④
 「所詮、人間はワガママな生き物だ」と開き直るのも、「自分はなんて醜いのだろう」と罪悪感に浸るのも、どちらも現実逃避です。だったら、いったん「これが自分の現状の姿だ」と認めてみるのはどうでしょう。すると、自分も含めて世間では配慮や氣遣いに飢えている人だらけの有り様が見えてくるはずですよ。それに注目すると、別のストーリーが浮かび上がってきます。^⑤

つまり「私のことを氣遣って欲しい」という承認に向けた飢えが根底のところまで訴えているのは、「私は他人の目を気にする自分ではなく、私は私であることに配慮したい。自分を肯定したい」という切実さです。

誰しも自分を大切にしたい。尊重したい。そしてできれば敬意を払われたい。けれども、自分のことよりもみんなに合わせ、協調しないとこの社会では爪弾きされてしまいます。

みんなの顔色を窺い、空気を読むためには、自分の気持ちや思いや感情を押し殺さなくてはいけない。この社会で生きていくために「そうあるべきだ」と教えられた通りのことをきちんと身に付けてきました。その結果、常識をわきまえた人間に育ちました。人からは褒められるかもしれませんが。

しかし、褒められるのはみんなと一緒にだからで、決して私が私として認められているからではありません。そのことに当人はどこかで気づいているはずですよ。私が私として存在している。この単純なはずのことがかなわない。そのことへの葛藤が自己肯定に対する飢餓感として表れているのだと思います。端的に言うと、私らしくいたい。あるがままの自分としていたい。「我がまま」でいいのです。

実はベビーカー問題に限らず、迷惑とワガママをめぐる論議の背後には、「私らしくいたい」があるのではないのでしょうか。みんなの存在を口実にして、遠回しに自分を承認してもらおうのではなく、私は私であることをただ肯定したい。恐れからそうは言えない気持ち「周りへの配慮がない」にすり替わってしまうのだと思います。

私は私である。この単純で強い言葉はみんなからひとり離れて歩くこと、みんなといたずらに同調せず、ときに迷惑やワガママと言われかねない行動を促します。(E) 口に出してはならないことでした。口に出してはならないからこそ、あらゆる機会を通じて遠回しに自覚のないままに、ヒョウシュツしていると言えます。決してはっきり言わないが、何か察して欲しいことを否定やねじれた形で伝えようとする。それを目にした側は当然ながらモヤモヤします。

実はベビーカー問題への非難の声に感じたモヤモヤが示しているのは、「」という悲鳴であり、意図せざる自己の表明だったのではないのでしょうか。

尹雄大『モヤモヤの正体』より

【語注】

(注1) 顕示欲 … 自分のことをはっきりと示したいという気持ち。

(注2) 葛藤 … 心の中に違った方向や相反する方向の考えが合って、選択に迷うこと。

問一 部①～⑤のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。(楷書で、ていねいに書くこと)

問二 (A) () (E) にあてはまる語としてふさわしいものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。
 ただし、同じ記号を二度以上用いてはいけません。

A しかし イ しかも ウ だから エ つまり オ ところで

問三 次の一文が本文から抜け落ちています。この一文が入るのに最もふさわしい箇所を、本文中の①～⑤の中から一つ選び、記号で答えなさい。

では、凡人なりにどうすればいいのでしょうか。

国 語

問四 ―― 部1 「この言い回しはなかなか使い勝手がいいものです」とは、どういうことでしょうか、六十字以内で説明しな
れど。

問五 ―― 部2 「これを口にする人の思惑」とはどのようなものですか。その説明として最もふさわしいものを、次の中から
一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 責任を逃れるために発言の主体性のなさを上手く演出しようとしている。
- イ 他人の迷惑になる行為はつしむべきだということを教えようとしている。
- ウ どうしようもなく困り果てていることに対して手助けをしようとしている。
- エ 強い正義感から間違っていることに対しての強い怒りを伝えようとしている。
- オ 自分が不快な思いをしてることについて何かしらの対応を求めようとしている。

問六 ―― 部3 「決して起きてきている出来事への関心ではない」とありますが、筆者がそのように考える理由として最もふさわし
いものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 幼いときからの学習や訓練によって、自分の素直な気持ちを抑圧することを身につけているから。
- イ 日本人は意見を言うことが苦手なので、他人には知られないように巧妙に意見を隠しているから。
- ウ トラブルに巻き込まれることを避けるため、必要以上に他人に関わることはしようとしなから。
- エ 周囲から受け入れられないことへの恐れから、物事の判断基準を他人に預けてしまっているから。
- オ ワガママだと思われぬようにするために、興味のあることであっても意識的に避けているから。

問七 ―― 部4 「別のストーリー」とはどのようなものですか。八十字以内で説明しなさい。

問八 本文中の X にはあてはまる語としてふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 周囲の人たちの意見や考えを知りたい
- イ 子供よりも私のことを気遣って欲しい
- ウ 自分の感じていることをみんなと共有したい
- エ 電車に乗るならしつけをしつかりして欲しい
- オ 社会全体で子供を大切にしなければいけない

国語

二

夏休み中の図書委員の活動をきっかけに仲良くなった、俺(おれ) (霜村典)・鯨井夏野(くじいのかの)・瀬尾幹(せおみき)・寺々矢(てらさきや)は「笹屋(ささや)」という名前のバンドグループを結成した。四人は完成した曲を動画サイトに投稿(とうこう)したが、再生回数はなかなか伸び(の)なかった。メンバー四人は、次の目標を立てるためにグループ通話で話し合いを行うことにした。それに続く、次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

『観て。動画。今すぐ』

電波状態が悪いのかと思うくらい、ぶつ切りのことばを鯨井さんは発した。「動画？」と訊(き)き返しながらリユックサックを放つて机に近づく。マウスをつかんでしゃっしゃつと左右に動かすと、パソコンがスタンバイ状態から目覚めて画面が明るくなる。

早く早くとセカサレ(セカサレ)ながら、ようやくブックマークしてある自分たちの動画にたどり着いた。自動的にピアノとギターの音色、そして鯨井さんの歌声が流れ出す。

いつも通りで、(a) 変わったところはない、……んん？ ある！

再生回数！

ケタがひとつ変わってる。最後に見たときよりいきなり十倍以上になってる。あきらめてたのに、信じられないようなのびだ。なんだ、どういうことだこれ。

『わたしも今気づいたの。八時半まで待てなくて、かけちゃった』

こんなこともあるんだねえ、と鯨井さんはしみじみ言った。初めて高評価がついたときはかなり慎重派(しんちょう)だったけど、今回は声がここにこしている。すごく楽しそううれしそうで、俺までどんどん顔が熱(あつ)くなってくる。

そうだ、もしかして評価ボタンも……？ あ、グッドの数増(あ)えてる！ うわうわうわ。

比例してバッドもちよっと増(あ)えてるけど、まあしょうがないよな、うん。それにしたってやっぱり再生回数の急な増え方に目がい。何が起きたんだろう。

『こんばんは。もう始(は)まっている……？』

柔らかい声が通話に加わってきて、俺と鯨井さんは「幹(かん)！」と叫(さけ)んだ。

『えっ、えっ、なに？』とびびる幹に、今度は俺が「観て。動画。今すぐ」と伝(つ)えた。幹もすぐページにアクセスして、その結果、驚(おどろ)きと喜びのセットがリプレイされた。

三人ともものすごく興奮(こうふん)していた。そして一刻も早く、この興奮を残りのひとりにも味わってほしかった。笹屋の体験として分かち合(わ)いたかった。

本来の開始時刻になったころ、ギターのアイコンがようやく通話画面に現れた。

『ごめん』

入(い)ってきた瞬間(しゅんかん)、佐々矢は言った。俺も鯨井さんも幹も、その声を聴(き)いてまたテンションが上がって、(b) 佐々矢の名前を呼(よ)んだ。

謝(あや)まないでいいよ、勝手に始めちゃってただけだし。それより聞いて、すごいことが起きた。

勢(いき)いこんで説明しようとした俺は、『ごめん』って声(こゑ)がふたたび耳(みみ)もとから聞こえてきて、¹ 反射(はんしゃ)的にはと黙(だま)った。

二度目のごめんが、一度目より、なんだか重(おも)くひびいた気がして

『……同じクラスのやつに動画がバレた』

佐々矢は言った。いつも以上に低い声で。

『ギター習(まな)ってるのは前から教えてて、……グループ研究でバンド組(く)んだって話(わ)したら、曲聞(き)かせろってしつこかったんだ。いじられんの嫌(いや)でごまかしてたんだけど、……あいつら資料室(しやうりつしつ)でレポート読んで、バンドの名前知(し)って、ネットで検(けん)索(さく)したって』

淡々(たんたん)とした説明(せつめい)が、知(し)ってる佐々矢(ささや)じゃないみたいだった。何かをきつく押し殺(ころ)してる、その冷静(れいせい)さがただおそろしかった。すでに取り返(かへ)しのつかないことが始(は)まっているのが嫌(いや)でもわかって。

耳(みみ)に届(とど)く情報(じふほう)をひとつずつ判断(はんぱん)している自分と、パソコンの画面(がめん)をぼんやり見(み)つめたままの自分が、ずれて切りはなされていく気がした。² それをまた別の自分(おのれ)が眺(なが)めている。

きいんと耳鳴(みみなり)りする。うるさい音(ね)。気持ちの悪い音が。

国語

どこかで鳴ってる。

『部活とか塾で広めたらしくて。四組以外でも、もう噂になってるっぽい』
あ。

——ああいうことやるタイプなんだね。イガイすぎてびっくりしちゃった。

今日の昼間、黒板前でくすくす笑ったクラスメイトの顔がぱっと浮かんで、ぐにやりと歪む。なんですぐ思い当たらなかったんだらう。あれはこの話だったんだ。

レポートに書かれている氏名と役割分担を知っていれば、動画に顔が出てなくなつて正体は簡単にわかる。コースとして参加してる、首から下だけ映ってるこいつは、一年一組の霜村典だと。

再生回数が急が増えた分は、全部、同じ学校のひと？ 知ってるやつが投稿してるぞって、とりあえず観にきただけの？

『……幹、……幹、ごめん』

俺は半端に口を開けたまま、その佐々矢の声を聴いていた。幹はなんの反応も返さなくて、鯨井さんが心配そうに『幹？』と呼びかけたけど、それきりまた聞こえるのはうすいノイズばかりになった。電話口にいるのかどうかすらわからない。

それでも佐々矢は謝り続ける。

かすれた声で幹を呼んで、何度もなんども、ごめんと言う。

『オレのせいだ。オレがあいつらに、しゃべったりなんかしたから……。さつきからめちゃくちゃLINEが来てる。「あのピアノ弾いてんの誰だよ」って』

動画はすぐ非公開にした。

コメント欄に学校名をにおわせて『H2中のひとはグッド押して！』と書きこんだ人間がいて、(c) 数人が反応していたから。これ以上放っておくのはキケンすぎた。

でも一年生を中心に出回ってしまった情報は、もはや取り消しようがなかった。

実際のところ、どのくらいの生徒が笹屋の存在を知ってるんだろう。校舎を歩いたり、集会で体育館に整列したりするたびに、ここにいる全員が俺たちの動画を観たんじゃないかって感覚にとらわれる。

きつと自意識過剰だ。

でも自分の知らないところで、自分のことが確実に知られてる。ほとんど恐怖だった。

「典のグループ研究ってバンドだったのなー」

「寺と仲いいの知らなかった。あと誰だっけ、三組のひと？」

同じクラスでも何人か、当たり前のようにチャンネルにアクセス済みだった。部活仲間経由だったり、塾の知り合い経由だったり。この前の日直の女子から聞いたってひともいた。

口から口へ、SNSからSNSへ。広まったルートが多すぎてもう全体は見えない。

「なんで非公開にしちゃったんだよ、観たかったのに」

あとから知つたって友だちからはクレームがついて、(d) 返すことがなかった。別の友だちが「俺は観ましたあー」とふざけて挑発したので、あとの会話はそっちで続いた。

「えー、どんな感じだった？」

「普通。あ、音質ちよつと悪かったな。スマホで録ったっぽくて」

「ふうん。なあ、また公開してよ」

俺はあいまいに笑ってごまかした。「普通」っていうのをどう受け取ったらいいのかわからない。ほめられたのか？ 喜んでいいのか？

これまでほとんどしゃべることのなかったクラスメイトや、ほかの組のひと、ときには二年生や三年生にまで声をかけられるようになった。「動画観たよ」とか「バンドやってるんでしょ？」とか。相手はすごく軽いノリなんだけど、毎回戸惑ってしまう。

中には「おもしろかったー！」なんて言ってくれるひともいて、ありがとうとお礼を伝えはしたけど、どこか④ ナットクできない思いが残った。どうやら歌詞とか音楽が「おもしろかった」わけじゃなくて、身近な人間が動画をつくって投稿してたことに対し

国語

て、笑っちゃったって話のようで。

「よくやるね。なんでそんな自信あんの？」

廊下ですれ違いざま、はつきりばかにされたこともある。今後まったく関わることはなさそうな先輩で、だからこそ好き勝手言うてやるって態度が見えみえだったので、さっと会釈してはなれたけど。

心の中はいろんな感情でどろどろだった。

よくやるねって、そんなの言われなくなつてわかつてるよ。自分の書いた詞とか、自分の歌ってる声とか、全部はずかしいよ。

最初から自信なんて全然なかったよ。

……ああ、でも。そういえば。

図書室で(e) 校歌を歌うことになったときも、初めて書いた歌詞を読んでもらったときも、俺、三人にばかにされるんじゃないかって不安はあんまりなかったな。鯨井さんも佐々矢も幹も、そんなひとじゃないだろうってふしぎと信じてた気がする。

夏休み。図書室。

四人で過ごした時間がまた遠ざかって、3 心がしんとする。

「チャンネル名を笹屋にしようって、あのときわたしが言ったから。こんなことになってごめんさい」

鯨井さんはいきなり身体をぐっと折り曲げた。つむじが見えるほどのその謝り方に、俺はあわてた。

「や、そもそもチャンネルつくろうって言い出したのは俺だよ。もつとよく考えてからやらなきゃだめだった。ごめん」

「ううん！ 典は別に……」

がばつと鯨井さんが頭を上げると、すかさず佐々矢が口をはさむ。

「誰が悪いとかじゃねーよ。はい、この話終わり」

俺たちは今、旧校舎と新校舎をつなぐ渡り廊下のはじっこに立っていた。これからどうしたらいいかを直接話し合いたくて、俺が放課後にふたりを呼び出したんだ。昼間とは違ってこの時間帯、ここはあまりひとが通らない。

新校舎三階の窓が開いていて、吹奏楽部の練習が聞こえてくる。

来週は文化祭だから、そこで披露する曲なのかもしれない。このサビ知ってる、サカナクションの……。歌えるのに題名が出てこない。

「ま、有名になるっつーのも大変なんだなって、勉強になったわ」

音の降ってくる方向に視線を上げながら、四角い柱にべったり背中をつけて佐々矢は言った。いつものように笑ってはいるけど、横顔が少し疲れている感じがする。

笹屋ってチャンネル名とすぐに結びつくせいで、いちばん迷惑をこうむったのは佐々矢のはずだ。きつとあちこちで質問攻めにあったらうし、動画を広めたって友だちとも教室でつねに X を合わせなきゃいけない。

そもそもグループの名前を決めたとき、本人はあまり乗り気じゃなくて、俺たちが押し通してしまっただけなのに。それでも責める気はないんだ。……やっぱり、ごめんと謝りたくなる。

「けど誰が悪いとかじゃないって、その佐々矢が言ってくれたんだって。」

「わたしと佐々矢、つき合ってるんだってね。知ってた？」

渡り廊下と中庭の境目にしゃがみこんだ鯨井さんが、すぐくつめたい声を出して、俺はぎょつとした。

つき合ってる？

ついていけない俺を A よそに、「知らねーなあ」と佐々矢が即答した。むしろ、十分すぎるほど知ってるという雰囲気だ。

それでやっとなげく。そういう噂が流れていること、そんなまで相手にしなきゃいけないって、ふたりとも ⑤ シンソコウんざりし てるってことに。

「あーあ。デマにはもう飽きました！」

佐々矢が両腕を大きく上げてのびをした。

ブレザーの裾が腹のあたりまでぐーっと持ち上がって、すんと戻る。

「どうせバレたんなら、いろんなやつと音楽の話がしてーよな。オレたちも全然ミーティングしてなくね？ ……どうしてっかな、

幹」

俺は新校舎の一階に目をやる。第三理科室の窓には黒いカーテンがきっちり引かれて、中の様子は見えない。

国語

動画でピアノを弾いているのが瀬尾幹の手だと、気づいたひとは果たしていたのだろうか。たとえ俺たちが秘密を固く守っても、図書委員会の当番表を目にしたり、夏休み中に図書室を利用したりした人数を考えれば、きっと誰かは勘づいたはずだ。幹はあれから、LINEにも反応をくれない。ミーティングどころか、四人のやりとりそのものが前にくらべてすっかり減ってしまった。

動画を観てくれるひが増えるのはいいことのはずだった。やるからには注目されたかった。だけど想像とはまるで違って、コントロール不能な流れに呑まれて、うまく息が継げない。

俺に何ができる？ **B** ひとり歩きしていく評判と、どう向き合えばいい？

こんなときこそ一緒にいたいのに。

第三理科室の窓まで、駆け寄ればほんの数秒……。

そのとき突然、しゃがんでいた鯨井さんがぱっと立ち上がった。勢いよく左手で佐々矢の腕をつかむ。

何が始まったのか、目の前の光景を **C** 呆然と見ていると、くるつとふり向いた鯨井さんが今度は俺に向かって右手をのばした。

手首をぎゅつとにぎられる。その力強さに驚いて、よろけるように一歩近づく。

「好きだよ」

鯨井さんは言った。何かに立ち向かうように。

俺と佐々矢をさらに引き寄せて、

「わたしは好きな子たちとバンドを組んだの。その何がだめ？」

茶色い目はどこかをにらんでいる。校舎か、その上の青い空を。

吹奏楽部はさつきから同じ部分をしつこく演奏していた。たぶん顧問から、そこが合っていない、もっとこうしてと指導されてる最中なんだろう。

いろんな楽器が呼吸を合わせていつせいに鳴って、盛り上がってきたところでぱっと止まって、また始めに戻されて。

「……だめじゃないよ」

俺が答えると、ねーな、と佐々矢も言った。鯨井さんは何もしゃべらなかった。けど、つかんでくる手の力がふっと抜けた。

だから俺から **4** にぎり返した。

真島めいり『夏のカルテット』より

【語注】

(注1) LINE … インターネットを利用して他者にメッセージを送ることができる機能のこと。

(注2) SNS … インターネットを利用したサービスのこと。離れた距離でも他者とのやり取りができる。

問一 部①～⑤のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。(楷書で、ていねいに書くこと)

問二 部A～Cの語句の本文中の意味として最もふさわしいものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A 「よそに」

ア 頼りにして イ 気にして ウ あしらって エ 無視して オ からかって

B 「ひとり歩き」

ア さらに多くの正確な情報が作られること イ はじめの意図と関係なく変わること

ウ 情報が組み合わせられて忘れられること エ その分野に詳しい人から聞いたこと

オ 一人では思いつかない考えが浮かぶこと

C 「呆然」

ア 気分がふさぎこんでいること イ 何も考えずぼんやりしていること

ウ あっけにとられていること エ 一つのことにならなくなったこと

オ 物事に期待を持っていること

国 語

問三 (a) (e) に入る語としてふさわしいものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。
ただし、同じ記号を二度以上用いてはいけません。

- ア とくに イ ふいに ウ めったに エ とつさに オ くちぐちに カ すでに

問四 —— 部 1 「反射的にはっと黙った」とありますが、なぜですか。その説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 動画の再生回数が増えた喜びでいっぱい、周りの声を聞こうとしていなかったが、佐々矢が二回も「ごめん」と言ったことで、ようやく我に返り話を聞こうと思ったから。

イ 動画の再生回数が最後に見たときからいきなり十倍以上になったので嬉しさでかなり興奮していたが、冷静な佐々矢の声を聞いて、そこまで喜ぶほどの結果ではないことを痛感したから。

ウ 動画の再生回数が増えたことに気が付いたのは鯨井さんに教えてもらったからだだったが、まるで自分が気がついたかのように、得意気に佐々矢に話をしようとしたことを恥はずかしく思ったから。

エ 佐々矢が謝っているのは遅れて参加したことに対する謝罪であり、それ自体は大したことがないと思っていたが、声の様子から自分が予想していたものよりも深刻な理由があると気付いたから。

オ 佐々矢が自分たちに謝ってくる理由の意味が最初は分からなかったが、放課後話したクラスメイトが浮かび、自分も心当たりがあったのを思い出し動画がクラスメイトにばれたと思ったから。

問五 —— 部 2 「それをまた別の自分が眺めている」とありますが、どういうことですか。五十字以内で説明しなさい。

問六 「 Xを合わせなきゃいけない」の Xに体と関係のある漢字一字を入れて、慣用表現を完成させなさい。

問七 —— 部 3 「心がしんとする」とありますが、どういうことですか。その説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 夏休みに集まって曲を作った大切な思い出が、遠い過去のことになればなるほど懐なかしいものに変わっていくと感じているということ。

イ 夏休みに集まって曲を作った大切な思い出が、時間の経過とともにどんどん昔のことになり忘れられてしまうことを悲しく思ったということ。

ウ 夏休みに集まって曲を作った貴重な体験が、投稿した動画を周りから冷やかされたことで価値のないものに変わってしまい静かに怒っているということ。

エ 夏休みに集まって曲を作ってはしゃいだ時間が、今になってみると子どもっぽい行動であったと思われ、つまらない時間だったと残念がっているということ。

オ 夏休みに集まって曲を作った楽しかった時間が、作品が他人からどう評価されるか分からない不安から振り返りたくない時間に変わってしまい、寂しく思っているということ。

問八 —— 部 4 「にぎり返した」とありますが、なぜそのようにしたのですか。八十字以内で説明しなさい。

国語解答用紙

受験番号	
氏名	

一									
問八	問七			問五	問四			問二	問一
								A	①
								B	②
							C		
								D	③
								E	④
							問三		
									⑤
								※	
80	60	40	20		60	40	20		

※の欄には何も書かないこと

二										
問八				問六	問五			問三	問二	問一
								a	A	①
										かされ ②
				問七				b	B	
										③
								c	C	
								d		④
								e		
										⑤
								問四		
								※		
80	60	40	20		50	40	20			

※
